

鶴戸 聡

アルジェリアのフランス語文学は、植民地末期の一九五〇年代に爆発的な興隆を見せるや、独立後の七〇年代にアラビア語文学が勃興した後も衰えを知らず、むしろ九〇年代の原理主義テロリズムとの戦いを通じて確固たる地位を築き上げた観がある。

本短篇の著者ムスタファー・ベンフォーディルは、内戦が熾烈を極めた九七・九八年に兵役に就き、その間に処女小説『ザルタ』（脱走兵）を執筆、二〇〇〇年に出版してからは、「暗黒の年月」の後に新しく登場した若手作家たちの代表格として高く評価されている。

一九六八年にマラブー（イスラム聖者）の家系に生まれたカビール人（先住民ベルベルの一派）で、九四年にジャーナリストとなり、イラク戦争中はバグダードに派遣された。ルポルタージュとしても『バグダード最後の一日間』（二〇〇三年）を出版している。

二〇〇〇年に作家のソフィアーン・ハッジャージらの手によってアルジェに設

立された文芸出版社 *Boutayeb* からベンフォーディルの作品は出版されており、フランス経由ではなく直接アルジェリア国内に向けて作品を発表する新しい作家たちの一人である。ただし本作は「フランスにおけるアルジェリア年」にパリで出版されたアンソロジーに発表されたため、自註を多くして背景の説明に努めているようだ。

この短篇は一種の掛詞や縁語を多用したレトリカルな文章で書かれており、フランス語の成句をもじった表現が頻出する。文体も大仰な表現からくだけた会話体までを自在に行き来し、アクロバティックに繋がった長文と簡潔に過ぎるほどの短文が共存している。おそらくは言葉そのものに対する意識が最も高い作家の一人であり、本人もセリーヌの影響を認めているが、文章上の工夫の余り文意がときに不明瞭となるのが珠に瑕と言えようか。

物語は、体制へのアイロニカルな批判を交えつつ、ハルキ（独立戦争を仏側で戦ったアルジェリア人兵士）の遺骨の帰還をめぐって展開するが、現在に至るまで繰り返し発現する暴力を厳しく見据えなが

ら、取引としての和解ではない、純然たる「赦し」の可能性を探ったものとして普遍性を帯びる。

また、マグレブ文学に特徴的な（聖者・狂人）のモチーフを、妄想や狂気のヴィジョンとしてではなく、超自然的な幻想として物語に仕掛けた点に、アルジェリア文学にとっての新しさが感じられよう。

ベンフォーディルは、ラシード・ミニニについて卒業論文を書き、ターハル・ジャウートに捧げる詩も作っているが、深刻なテーマを扱いながらも一貫してユーモアを忘れないところは、ラバハ・ベルアムリを想起させる。これら八〇年代に活躍したカビール作家たちの衣鉢を継ぐ者としても今後の活躍が最も期待される若手の一人である。